

小学校外国語・外国語活動における

語彙の意味理解と指導の工夫について

ーTPR, 文脈提示, 絵カードを中心とした実践を通してー

M18EP009

田形 麻巳子

1. 研究の目的

本研究は小学校外国語・外国語活動における児童の語彙の理解に着目した指導の手立ての有効性とその課題について検証するものである。

2020年度から小学校では、3、4年生に外国語活動、5、6年生には外国語科が教科として導入される。その理由のひとつとして、小学校での英語の学習が中学校段階の英語学習に生かされていないことが挙げられている。文部科学省(2017)『学習指導要領解説外国語編』にも「①音声中心で学んだことが、中学校の段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていない」(p.7)という課題があることが指摘されている。そのため、音声中心で学ぶ小学校での外国語科の学習の成果を後の文法や読解などの学習につなげる中学校段階までを見通した指導が重要である。そこで筆者がその指導の一つとして目を付けたものが語彙学習・指導である。樋口ら(2018)は「英語学習の語彙指導は重要な役割を果たしている」(p.106)としている。さらに樋口によって「語彙の知識がないと英語で理解したり発表したりする際に支障をきたし、適切な語彙の選択ができないことで誤解や摩擦が生じる」(同p.106)ことが指摘されている。そのため、筆者は小学校段階で適切な語彙知識を身に付けることが中学校や高校までを見通した指導につながると考えた。

小学校で教えるべき語の内容については学習指導要領に書かれている。そこには「第3学年及び第4学年において第4章外国語活動を履修する際に取り扱った語を含む600～700

程度の語」を指導することとしている。また、この語彙はすべてを同じように教えればいいのではなく、「意味を理解できるように指導すべき受信語彙と表現できるように指導すべき発信語彙がある」(同p.90)とされており語彙習得の到達の種類によって指導の方法も変えていかなければならないことが考えられる。

小学校での外国語科の指導方法については様々な方法が取り上げられている。例えば、学習指導要領ではジェスチャー、イラスト、写真、実物などが取り上げられている。そのため、どの語彙や表現に対して、ジェスチャーなどの手立てが有効であるのかを考える必要がある。また文部科学省(2018)の『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』では「児童は単語一つ一つを理解しているのではなく、発話場面、教材の絵、ジェスチャー等を手がかりとして、指導者の発話を推測している」(p.148-149)としていることから語彙の提示方法の工夫を適切に使用することによって、児童に語彙の理解を促すことができると筆者は考えた。

そこで本研究は、小学校英語教育における語彙の指導に着目し、その指導の手立てを用いた授業実践を行い、手立ての有効性と課題を検証することを目的とする。また、語彙の品詞の種類によって指導方法を変える必要があると考え、動詞と名詞で用いる手立てを変えて実践を行った。

また、本研究においては英単語の意味を知識として理解できる児童の育成を目指す。そのために品詞別に語彙の適切な指導方法の効

果を検証したい。具体的に、動詞には「TPR」名詞に対しては「絵カード」と「文脈提示」を組み合わせた手立てを取り上げる。

2. 研究方法

(1)対象者 山梨県公立小学校 5年生(35名)

(2)研究の流れ

① 事前語彙テスト

② TPR による授業実践

絵カード、文脈提示による指導実践

③ 事後語彙テスト

なお、語彙テストの内容は事前と事後で同様のものを用いた。その理由は、語彙を事前テストの実施によって理解していなかった児童を抽出し、授業である特定の方法的語彙指導を行った後に事後テストでどれほど理解を促すことができたのかを見るためである。

3. 研究の内容

(1)目指すべき児童の姿

文部科学省(2017)『小学校学習指導要領解説 外国語編』の目標に目を向けると「外国語において、英語の文字や単語などの認識を音声や文字、語彙、文構造について日本語と外国語の違いに気付き、これら知識を理解するとともに実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする」(p.65)とある。このことから小学校段階では、まず英語の語彙の意味を理解させる必要がある。また理解に関しては、慣れ親しんだ単語の文字と音の関係を大まかに理解して読めるようになったり、慣れ親しんだ語彙や表現を他の視覚的な情報などを使い推測しながら読めたりできるようにすることが大切であるため、初めて触れる語彙に関しては、大まかに語彙を理解させることが求められる。本研究では、英語の語彙を知識として理解できている児童として、以下の2つの段階を設定した。

①英単語の文字と音声でその単語の意味を書くことができる児童

②その単語の音声と文字でその単語の意味を

イメージすることができる児童

(2)研究の重点

文部科学省(2017)『学習指導要領解説 外国語編』によると、英語の指導に関しては「表現を発話するだけではなく、表情やジェスチャーを付けたり、感情や状態を表すイラストや実物、写真などを見せたりして自分の気持ちが相手に伝わるように工夫しながら、コミュニケーションを図らせるように配慮する必要がある」(p.51)とある。したがって授業においては、これらの手立てを有効に活用する必要がある。更に文部科学省(2018)の『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』には「児童は単語一つ一つを理解しているのではなく、発話場面、教材の絵、ジェスチャー等を手がかりとして、指導者の発話を推測している」(p.148-149)ことから効果的な手立てを英語学習の初期である小学校段階で与えることが重要である。また、門田ら(2006)によると「オーラルイントロダクションによって単語の音声とイメージを活性化したり、訳語以外の意味情報を活性化したり」(p.38)する工夫が大切であるとしている。そのためイメージを活性化させやすい手立てを用いる必要があると考えた。研究の目的でも述べた通り、動詞と名詞の2つの指導の方法に着目し、手立てを考えた。以上のことから、本研究では「TPR」「絵カード」「文脈提示」の3つ手立てを取り上げ、研究の重点とした。

3. 授業実践

(1)授業の計画

①対象者 山梨県公立小学校 5年生(35名)

②日時 10月・12月(計2時間)

③単元

○『We can! 1』 Unit5「She can run fast. He can jump high.」(1時間)

対象語彙 swim, run, speak, fly, ride

○『We can! 1』 Unit8「What would you like?」(1時間)

対象語彙 vegetable, parfait, carrot, mother,

grandfather

(2)対象語彙について

重点的に指導する語彙を対象語彙として、1時間5つの英単語を取り上げた。望月ら(2003)は「事前に重点的に指導すべき語を決めておくことが大切である」(p.110)としていることからあらかじめ重点的に指導する語を5つ選定した。これら5つの語彙の選定理由は、望月ら(2003)の「比較的動作が簡単である語から指導する」(同 p.110)を参考にしたことと、調査の都合上、指導による未知語の理解の程度の検証を対象としたいため、多くの児童が未知であると予想される語を取り上げたかったからである。

4. 研究の重点

(1)-①TPR について

TPR(全身反応教授法)とは、「James J. Asher が提唱した、指導過程の全てにおいて学習者が作業や動作を行い、実際に言葉の意味を体験する指導法」(Richards and Rogers, 1986, p.87)である。特徴としては「意味は動作を通じて与える、学習事項の定着や記憶の保持が良い、話すことを強制しないので緊張感がないなど」(田崎,1995, p.156)があり、英語を学び始める初級、中級向きの指導方法として用いられている。

筆者は、音声中心で教える小学校の英語教育ではTPRを授業に適宜用いることで、児童の単語の意味理解を図ることができると考えた。また意味は動作を通じて与えられるので、動詞を教える際に有効であると考え、本研究では動詞を対象にTPRを用いた実践を行った。

(1)-②TPR を用いた手立て

本実践では5つの対象語彙に対し、身体的な動作による指導を行った。TPRで用いた動作は以下の通りである。



図1: swim の動作



図2: run の動作



図3: speak の動作



図4: fly の動作



図5: ride の動作

(2)-①絵カードについて

絵カードは多くの学校現場で取り入れられている手立てである。また、門田ら(2006)は「絵を使ってその語彙の中核となる概念を示すと、語彙のイメージをつかませることができる」(p.20)や「訳語に頼らない意味の理解にもつながっていく」(同 p.20)としていることから語彙の理解に非常に有効な手立てであると考えられる。

(2)-②絵カードを用いた手立て

本実践では5つの対象語彙に対し、絵カードと文脈提示による指導を行った。絵カードを用いた手立ては以下の通りである。

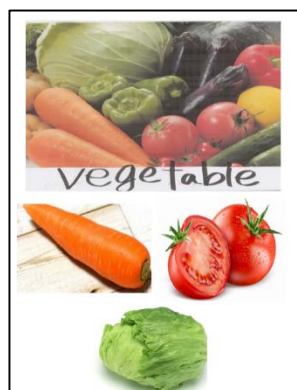


図6: vegetable, carrot
の手立て

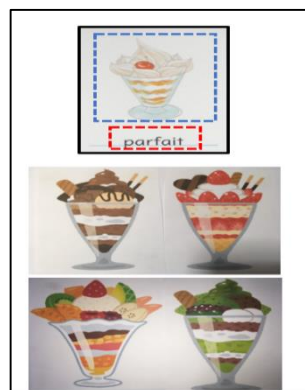


図7: parfait の手立て

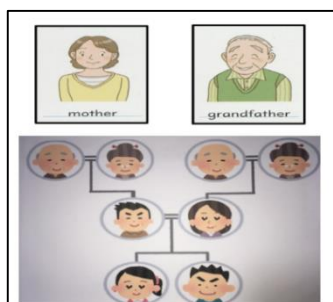


図 8 : mother, grandfather の手立て

(3)-①文脈提示について

門田ら(2006)は「意味情報を活性化させるための手段として、文脈を利用することが考えられる」(p.9), あるいは「語の意味は、文脈に左右され文脈によって明確になるので導入する語について例文という形で文脈を提示することはよく行われる」(同 p.9)とある。絵カードと文脈提示の手立てを組み合わせることで、意味情報がより活性化されると考えた。

(3)-②文脈提示において用いた具体的な文脈 vegetable の文脈提示

I like vegetables. Vegetable is good for our health. For example, Tomato, Cabbage, Lettuce, carrot.

Parfait の文脈提示

I like parfait very much. There are many kinds of parfait. Chocolate parfait strawberry parfait, fruits parfait, Matcha parfait. I like chocolate parfait. Do you like parfait?

carrot の文脈提示

Carrots is one of vegetables. Its color is orange. Rabbit likes carrots. But I don't like carrots. Do you like carrots?

mother の文脈提示

This is you. Your mother is here.

grandfather の文脈提示

Your mother's father and your father's father is grandfather.

(家族系統の英単語に関しては、絵カードの相関図を用いて説明)

小学校段階では難しい文は分からないので、簡単な語彙を組み合わせた文章を作成した。

また児童はただそれらの文を聞くだけでなく、文に反応できるように、最後に児童に簡単な問いかけを行うように指導した。また、絵カードと文脈提示の 2 つの手立てに関しては、それらを組み合わせて名詞の理解を対象に授業を行った。

5. 検証

全 2 時間の授業実践を通して、研究の重点である、動詞に対する TPR の手立てと名詞に対する絵カードと文脈提示を組み合わせた手立ての有効性を児童の学びの姿と語彙テストの結果から検証する。

(1) 児童の学びの姿

図 9 と図 10 と下記のプロトコルは、授業中の児童と教師とのやりとりの様子を取り上げたものである。

①動詞に対する TPR を用いた実践での児童とのやりとり



図 9 : 授業における児童の学びの姿①



図 10 : 授業における児童の学びの姿②

T 1: Can you swim?
 C 1: No. I can't swim.
 T 2: Oh. You can't swim.

T 1: Can you speak English?
 C 1: Yes! I can speak English.
 T2: Oh. Nice! Can you speak Degawa English?
 C 2: Hnn... I can't speak Degawa English.

②名詞を対象とした絵カード、文脈提示を組み合わせた実践での児童とのやりとり

T: I like chocolate parfait very much. Do you like chocolate parfait?
 C: (うなずき)
 C: I like chocolate parfait.

上記の写真とプロトコルから分かることは、教師からの問いかけに対し、児童が英語で反応する姿が見られたということである。①に関しては、動作と英語の文章のみで問いかけを行ったため、児童は英語の音声と動作を手掛かりにして、語彙の意味を理解したと考えられる。このことから **TPR** を用いた手立てには一定の効果があつたのではないかと考えられる。

②に関しても日本語訳は用いらずに指導を行ったため、児童は英語の音声と絵カード、文脈提示を手掛かりにして、語彙の意味を理解したと考えられる。また、英語で反応する児童は多くはなかったが、うなずいたり首を傾げたりする児童は多く見られた。このことから絵カードと文脈提示を組み合わせた手立てには一定の効果があつたのではないかと考えられる。

(2) 語彙テスト結果

語彙テストの結果から、事前の語彙テストで語彙を理解していなかった児童の指導後の変容を検証する。

①TPR を用いた手立ての実践

表 1：事後テストの結果(TPR)

	swim	run	speak	fly	ride
①	9 名	8 名	12 名	12 名	8 名
②	8 名	0 名	0 名	0 名	0 名
③	2 名	8 名	14 名	10 名	26 名
計	19 名	16 名	26 名	22 名	34 名

①～③は目指す児童の姿をそれぞれ表しており、①は英単語の文字と音声でその単語の意味を書くことができていた児童で、②はその単語の音声と文字でその単語の意味をイメージすることができる児童で、③は意味を理解していない児童、未記入の児童、である。計は、事前の語彙テストで単語の意味を理解していなかった児童の人数である。

表 1 から分かることは、どの語彙も事前テストよりは意味を理解している児童が増えていたことである。そのため **TPR** を用いた手立ては動詞に対して一定の効果があつたのではないかと考える。

②絵カードと文脈提示を組み合わせた手立て

表 2：事後テストの結果(絵カード、文脈提示)

	vegetable	parfait	carrot	mother	grandfather
①	4 名	20 名	5 名	5 名	8 名
②	0 名	0 名	0 名	0 名	3 名
③	9 名	11 名	4 名	0 名	0 名
計	13 名	31 名	9 名	5 名	11 名

表 2 から分かることは、どの語彙も事前テストよりは意味を理解している児童が増えていたことである。また、“**mother**”や“**grandfather**”などの家族を表す語彙は、事後の語彙テストにおいて意味を理解していない③の児童が 0 名という結果となっている。そのため本研究で行った絵カードと文脈提示を組み合わせた手立ては、名詞に対して一定の効果があつたのではないかと考える。

6. 考察

動詞に対して TPR という手立てを用いた授業実践は授業の児童の姿や語彙テストの結果から、児童に語彙を理解させる手立てとして一定の効果はあったと考えられる。しかし“ride”に関しては、意味を理解した児童はそこまで多くなかった。その理由として、動作だけでは表現することが難しい語彙であったからということが考えられる。“ride”という語は、動作と実物の 2 つを使うことにより、更に具体的にその語彙の意味を表現することができるため、今回行った TPR の手立てだけでは児童のイメージに残りにくかったことが考えられる。そのため TPR と文脈提示等を組み合わせる手立てなど、より児童がイメージしやすい手立てを考えていきたい。

また名詞に対して、絵カードと文脈提示を組み合わせた手立ての授業実践は、授業の児童の姿や語彙テストの結果から、児童に語彙を理解させる手立てとして効果的であったと考えられる。また、家族を表す語や“parfait”に関しては、児童の語の理解を大幅に高めることができたことから、本研究での手立てが非常に効果的であったと考えられる。それらの語の理解を大幅に高めることができた理由として、多くの文脈で語彙に触れさせられたことや文字と音声だけでは理解が難しいが、絵があると簡単に理解できる語であったことが挙げられる。今後は品詞だけではない語彙の性質の違いにも着目して指導方法について考えていきたい。

さらに、本研究では知識としての理解を目的としたため、実際に児童が語彙の意味以外の側面を理解していることが分かるかどうかの実感には目を向けなかった。しかし、語彙を技能として使えるようにするには、「できたという実感」をもつことはとても大切なことである。そのため、今後は英語を実際に使えるという実感をもたせるような指導を考え、実践していきたい。

7. 現場への示唆

本研究の教育現場への示唆として 2 点あげる。

- ①新出語を指導する際には、動詞は TPR を用いた指導が効果的である可能性があること。また 1 時間だけでなく継続的に TPR を用いて指導することで、より多くの児童が単語の意味を理解できることが考えられる。
- ②名詞は絵カードと文脈提示を組み合わせた指導は効果的である可能性があること。また多くの文脈で語彙に触れさせることで意味を理解しやすくなることが考えられる。

8. 参考文献

- 樋口忠彦・泉恵美子・加賀美哲也.(2018).『小学校英語内容論入門』研究社.
- 門田修平・池村大一郎.(2006).『英語語彙指導ハンドブック』大修館書店.
- 文部科学省.(2017).『小学校学習指導要領解説 外国語編』
- 文部科学省.(2018).『小学校外国語活動・外国語科研修ガイドブック』旺文社.
- 望月正道・相澤一美・投野由紀夫.(2003).『英語語彙の指導マニュアル』大修館書店.
- Richards,Jack, and Theodore Rogers.(1986). *Approaches and methods in Language Teaching*.Cambridge:Cambridge University Press.
- 田崎清忠.(1995).『現代英語教授法総覧』大修館書店.